

韓国国立リハビリテーションセンター訪問報告書
(日中韓リハビリテーションセンター相互連携事業)

自立支援局第二自立訓練部肢体機能訓練課
作業療法士 田中 匡

1. はじめに

日中韓リハビリテーションセンター相互連携事業の技術交流により、韓国国立リハビリテーションセンター（Korea National Rehabilitation Center、以下KNRC）を訪問する機会を得たので、以下の通り報告する。

2. 日程

平成31年3月12日（火）～3月14日（木）

3月12日（火）出発（移動日）

3月13日（水）韓国国立リハビリテーションセンター（KNRC）見学
9時30分～18時00分

3月14日（木）帰国（移動日）

3. 派遣職員 3名

学院 義肢装具学科教官 徳井 亜加根

自立支援局 第二自立訓練部肢体機能訓練課 理学療法士 市川 眞由美

自立支援局 第二自立訓練部肢体機能訓練課 作業療法士 田中 匡

4. 見学内容

今回のKNRCでは脊髄損傷者、特に頸髄損傷者に対するリハビリテーションを中心に見学させていただくことができた。午前中にはKNRCのBum-Suk Lee総長にご挨拶し、社会福祉課のUnjoo Kim先生よりKNRCの設置と役割などについてご説明いただいた。その後SCI病棟、PT室、OT室を見学した。午後は、Bum-Suk Lee総長にSCI



【総長室にて】

のリハビリテーションについての講義を聴講させていただいた。その後、スマートホーム（モデルルーム）、自動車訓練室、補助具（義肢装具）製作室、福祉機器展示室、リハビリテーションスポーツ、研究所などを案内して

いただくことができた。当日、私たちの希望を快く受け入れていただき当初のスケジュールよりも大幅に施設内を見学させていただくことができた。



【Unjoo Kim先生による講義】

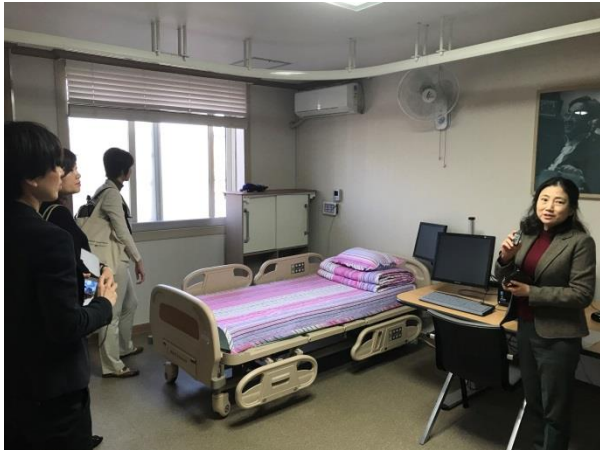
SCI専門の作業療法士は5名在籍し、車椅子～ベッド・トイレ・自動車運転席への移乗、自己導尿手技の指導などを行っている。車椅子～ベッドへの移乗訓練はC6より下位の損傷者が適応となり、前方・側方移乗の2つのアプローチを行っていた。ADLだけでなく机上でのアクティビティーも行っており、日本のOTと類似しているように感じた。



【研究所】

当センター研究所福祉機器開発部と機能訓練課OTで取り組んでいる3Dプリンタを用いた

自助具製作について、福祉機器開発部が連携しているKNRC研究所の職員と情報共有を図ることができた。



【スマートホーム】

見学した中でも着目したのは「スマートホーム」という体験型のモデルルームであった。「スマートホーム」は入院患者が在宅生活開始に向けて1週間の宿泊体験ができる部屋である。当事者はもちろんのこと、家族や介護者も利用することができ在宅生活を円滑に開始できるように取り組んでいる。スマートホームは3つあり、天井走行リフト、昇降可能なキッチンや洗面台、トイレとシャワー室を同じ空間に設置したり、車椅子利用者が洗濯物干しをできるように室内物干しが電動で昇降するなど、当事者や家族が在宅生活をイメージしやす

いように整備されていた。また1つのスマートホームにはICTも導入されており、家電リモコンパネルをタッチすることによってエアコンの操作、ブラインドや窓の開閉ができ、テレビについては音声で操作できるように整備されていた。当センター病院においても、家族指導を目的として患者様とご家族が居室に宿泊し介護体験を行う取り組みを行っている。医療から地域生活へ移行する狭間に位置する自立訓練施設として、KNRCのように在宅生活に近い環境を設定し自立生活や介護体験などの支援をすることは重要であると再認識することができた。



【家電リモコン】

5. 謝辞

今回の貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様、歓迎してくださった韓国国立リハビリテーションセンターのBum-Suk Lee総長、見学のコーディネートと長時間の通訳対応をしてくださったMinyoung Lee様、各部門の案内をしてくださった関係職員の皆様に深く御礼を申し上げます。

韓国国立リハビリテーションセンター訪問報告書

日中韓国リハビリテーションセンター相互連携事業

自立支援局 第二自立訓練部肢体機能訓練課
理学療法士 市川眞由美

1. はじめに

日中韓リハビリテーションセンター相互事業の技術者交流により、韓国国立リハビリテーションセンター（以下、KNRC）を訪問する機会を得たため、以下の通り報告する。

2. 日程 平成31年3月12日（火）～3月14日（木）

3月12日（火） 移動日

3月13日（水） 韓国国立リハビリテーションセンター

（Korea National Rehabilitation Center）見学

3月14日（木） 帰国

3. 派遣職員 3名

学院 義肢装具学科教官 徳井 亜加根

自立支援局 第二自立訓練部肢体機能訓練課 作業療法士 田中 匡

4. 見学内容

KNRCは、韓国では唯一の国立センターである。患者の70%が脳血管障害であり、20%脊髄損傷等の疾患である。センター機能は回復期病院の機能に加えて社会復帰支援機能も持ち合わせており、組織全体として、医学・福祉・介護といった多角的支援が可能な大きな組織である。施設は明るく、廊下幅も広く、清潔感のある環境である。近隣には飲食店なども多く、電動車椅子で走行している方や、介護タクシーを利用されている方を多く目にした。ソウル市内の環境は、歩道等は整備されていたが、日本と同様に路面には段差が多く存在し、手動車椅子での単独移動には介助が必要となる印象を受けた。また、市内は地下鉄の路線が充実しており、地下鉄や直結型のデパートでは電動車椅子を利用する方の姿を目にした。

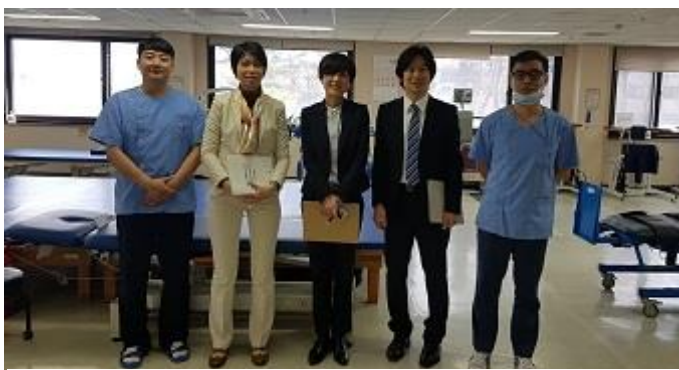


KNRCにて Lee 総長を囲んで

午前中に聴講した施設概要説明では、KNRCの取り組みの目的・役割について講義があった。KNRCでは1.リハビリテーション（医学的）2.社会復帰支援3.研究4.啓蒙（世界・国家・地域にむけた）を主に掲げている。医学的リハビリテーションでは、日本と同様に徒手的な治療に加えて、電子機器・ロボットなどを利用する取り組みが進んでいる。また、啓蒙的な働きかけとして、教育現場の中に障害理解・認識の改善・障害予防を目的とした教育プログラムを導入している。具体的には、車椅

子ユーザーの教育現場への訪問、公務員の新人教育・障害体験などがあり、障害を身近に感じられるような取り組みを提供している。また、諸外国の研修生を受け入れており、今回の視察では、タイからみえた研修生に対し、Lee 総長による「脊髄損傷者へのリハビリテーション」の講義が予定されていた。幸運にもその講義を聴講させて頂く機会を得ることができた。KNRC の取り組みは日本と類似点が多く、国内唯一のリハビリテーションセンターとしての役割は多岐にわたることを認識した。

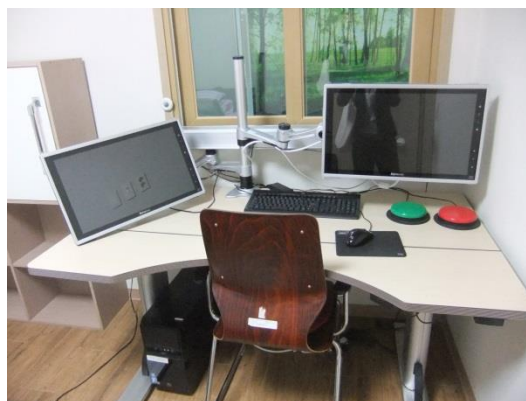
理学療法部門の見学では、脊髄損傷病棟を見学した。理学療法士は全体で50名程度在籍しており、5つの病棟に分かれて配属されている。理学療法の目標としては、社会復帰を目標に支援している。理学療法室は、プラットフォームマットや起立台・車椅子用トレーニング機器など日本と類似した機器が設置されていた。理学療法室内や廊下では車椅子操作練習や段昇降練習などを実施しており、マット上では寝返りやプッシュアップ動作練習に取り組む姿を目にした。



理学療法室にて

脊髄損傷者の移乗については、8割が側方移乗動作を利用しており、居室での移乗動作練習は理学療法部門が担っている。また、自動車移乗練習なども実施しているが、最近では理学療法士が自宅に出向く取り組みがすすめられており、施設内だけでなく地域生活に目をむけた取り組みが始まっていることを認識した。具体的なアプローチ方法やゴール設定・ADL動作方法といった情報交換には至らなかったが、福祉機器やトレーニング方法・内容は日本と共通のものが多く、特に手動車椅子や車椅子用物品については類似品が多く使用されていた。これらの環境面から推測するに、韓国での脊髄損傷者に対するアプローチ方法は日本と大きな相違はないように認識した。一方で、サービスを含めた制度の相違から推測すると、在宅生活環境を含めたゴール設定には相違点があるように窺えた。

Community Reintegration Service では、社会復帰や地域生活利便性向上を目的として家族や本人にむけて多様なプログラム（体験型）を提供している。このサービスの中には、デイケアサービス・リハビリテーションスポーツ・自動車運転訓練などの他、ご家族およびご本人が在宅環境のイメージを作るための宿泊施設（Smart Home Experience）が整っている。この設備には、疾患・機能レベルに応じた環境（玄関スロープ・電動扉・デスク周辺環境・トイレ・浴室・福祉機器）が備わっており、ご本人・ご家族がこの部屋で宿泊体験することで、具体的な在宅生活をイメージすることができる。この点については早期の社会復帰・地域円滑移行にむけた取り組みの一つとして、模範するべき取り組みであった。



Smart Home Experience

5. 所感

今回の韓国訪問では、KNRC の取り組みのみならず、韓国における理学療法状況を知ることができた。韓国では早期社会復帰および地域生活にむけて医学的・社会的なリハビリテーションが提供されており、各部門が専門性をもって取り組まれていることを理解した。今回の訪問にて最も理解できたことは、韓国と日本は類似点が多いことである。訪韓前は、文化や生活環境の違いから医療・福祉の現場で相違があると推測していたが、想像以上に環境面・組織課題などを含め類似点が多いことを認識した。また、組織の課題として「職種間の連携」が挙げられており、「連携」という課題は国を超えて私たち医療・福祉従事者が取り組むべき課題であることを実感した。

今回の視察において、理学療法士として訪韓させていただいた経験は、自身の知見を広める貴重な機会となった。今後は、この経験を他職種と共有し、臨床現場に少しでも反映していきたいと考える。

6. 謝辞

本事業での私どもの訪問を快くお引き受けくださいました韓国国立リハビリテーションセンター Lee 総長、他職種の皆様、長時間に渡り通訳としてご同行くださいました Lee Minyoung 氏に深謝するとともに、このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

韓国国立リハビリテーションセンター技術交流報告書

学院 義肢装具学科教官 徳井 亜加根

平成 31 年 3 月 13 日，日中韓 3 か国連携事業における技術交流のため韓国国立リハビリテーションセンターを訪問した。今回の訪問は，頸髄損傷者の機能訓練を実施している自立支援局肢体機能訓練課の市川眞由美 PT と田中匡 OT と一緒であったこと，本職が頸髄損傷者の上肢装具の製作を担当していることから頸髄・脊髄損傷者のリハビリテーションを中心に技術交流を実施した。その内容を以下のとおり報告する。

1. 韓国国立リハビリテーションセンター施設概要等

韓国国立リハビリテーションセンターの施設概要および設置理念，また，韓国における障害者を取り巻く現状について，社会復帰支援課長の Kim UnJoo 先生からご説明を受けた。先生がとてもにこやかにお話くださったおかげで私たちの緊張もほぐれ，和やかに 1 日をスタートすることができた。

【歴史】

1986 年 8 月 18 日	リハビリテーションセンター 開設
1994 年 1 月 29 日	リハビリテーション病院 開設
2008 年 11 月 12 日	リハビリテーション研究所 開設
2010 年 12 月 23 日	病床増設 (150 → 300 床)
2014 年 7 月 29 日	物理作業療法室 開設

【敷地面積・建物等】

敷地面積：45,810 m² (当センターの約 5 分の 1)

建物：教育行政棟，病院棟 (旧館，新館)，宿舍棟，生活館，研究棟，ナレ館 (健康増進センター)

【職員数】

正職員 300 名，非正規職員 150 名

【入院患者疾患別内訳】

脳卒中 70%，頸髄・脊髄損傷 20%

【韓国内障害者数 (2017 年)】

2,668,411 名 (人口比 5.39%)

約 90% が後天性

【韓国内医療従事者数 (2017 年)】

理学療法士	35,587 名
作業療法士	6,258 名
ソーシャルワーカー	3,588 名
義肢装具士	約 1,300 名



Kim UnJoo 先生によるご説明

2. 院長先生による特別講義

訪問の最初に Lee BumSuk 院長にご挨拶に伺ったところ、ちょうどタイから受け入れておられる研修医の先生方に脊髄損傷患者の機能訓練についての講義をされるとのことで、急遽、我々も受講させていただくことになった。また、私の方から頸髄損傷者の装具についての質問を多くさせていただいたので、四肢麻痺患者に対する装具についての講義資料を特別にご用意くださった。本当に急な受講申し出にもかかわらず快くご対応いただき、脊髄損傷のリハビリテーションでご高名な院長先生のご講義を受けることができた。



院長室にて記念撮影

(左から、Kim Ji In さん、Lee MinYoung さん、田中 OT、Lee BumSuk 院長、私、市川 PT、Kim Unjoo 先生)

3. 各部署訪問

各部署への訪問に際して、急な訪問リクエストをする等、当日のスケジュール変更を何度もお願いすることとなってしまった。関係部署との調整および英語の通訳として奔走してくださった国際協力室の Kim JiIn さん、1 日中日本語の通訳をしてくださった研究所健康保健研究科の Lee MinYoung さんには本当に良くしていただいた。おかげで要望どおりに訪問することができ、言葉の壁を感じることなく意見交換をすることができた。

訪問させていただいた部署は、物理療法室（理学療法室）、作業療法室、スマートホーム、義肢補助器室、国立支援技術センター（Korea National Assistive Technology Center : KNAT）、ロボットジム、レクリエーション文化室、リハビリテーションスポーツ室（ジム、体育館）、自動車運転訓練室（シュミレーター室、屋上教習コース）、研究所健康保健研究科、研究所補助技術研究科と多岐にわたった。本稿では義肢補助器室、国立支援技術センター、ロボットジムについて報告する。

【義肢補助器室】

日本における義肢装具士という職名は、韓国では「義肢補助器技師」と呼ぶため、本報告書では日韓共通の英語略称“PO”として記述する。韓国国立リハビリテーションセンターでは4名のPOが患者に対するすべての義肢、装具、スプリント、自助具の製作を行い、OTが製作をすることはないとのことであった。病院内（旧館）に位置し、入り口には展示スペース、入り口を入ってすぐに適合室、組立室、



奥に機械室，縫製室が配置されていた．総面積としては学院 P0 棟の組立実習室と同程度と思われた．

P0 の Kim JiMin さんから説明を受けたが，自助具に使用されているプラスチック材料のほとんどがポリカーボネートであるとのことであった．日本ではほとんど使用されていないポリカーボネートであるが，厳しいソウルの寒さにも耐えうる熱可塑性プラスチックで加工性も良いとのことであるが，日本で使用されているキャスト材では強度が低いとのことであった．

また，Kim JiMin さんは障害者スポーツに P0 がどのように貢献できるかという課題に対して，私が執筆した WHO リハビリテーションマニュアル「ゴールボール選手が装備する用具—プロテクターとアイシェードの簡易的製作方法について—」に目を通し，私が訪問する前にあらかじめ日本に質問用紙を送付して下さっていた．そのため，私は日本からアイシェードを持参して説明することができ，喜んでいただけた．

次に，頚髄損傷患者の方に対する装具について，実際に装着されている様子を見せてくださった．「前腕を回内位に保持することが頚髄損傷患者には大変重要で，回内装具がなければ自助具をうまく使用することはできない」と説明して下さった装具は軟性材料で製作した前腕回内装具だった．私も頚髄損傷患者における前腕回内装具の重要性を発表してきたが，私以外に回内装具を製作している P0 に会ったのは初めてだった．Kim JiMin さんと頚髄損傷患者に対する上肢装具の情報を今後交換してい

こうと約束できたのは大変ありがたいことであり、後日、約束どおり、韓国国立リハビリテーションセンターで製作されている上肢装具の資料をいただいた。日韓のリハビリテーションセンターに勤務し、同じ頸髄損傷者の上肢装具に携わる PO として一緒に技術向上を目指したいと思う。



「前腕回内装具と自助具を併用することでスマートフォン操作が可能となる」とのご説明

【国立支援技術センター (Korea National Assistive Technology Center: KNAT)】

国立支援技術センターでは、様々なスイッチ、意思伝達装置、ベッドやお風呂など住宅改修の展示および30台はあろうかと思われる車椅子の展示がされており、奥には座位姿勢評価室も設置されていた。日本よりもICTが進んでいる韓国らしく、実に多くのデバイスが展示されていた。案内して下さった Lim SungEun さんは数多くの展示品について丁寧にご説明くださったが、「もっと説明したいのに説明する時間が足りないので、質問があればメールで連絡してください」と最後におっしゃってくださった。それほど多岐にわたる展示品が一般に公開されていることが素晴らしいことだと感じた。



【ロボットジム】

ロボットジムの見学では、実際にロボットを使用したリハビリテーションを見ることは叶わなかったが、様々なロボットやトレッドミルなどが数多く展示されており、ロボットリハを積極的に実施されていることが窺われた。



4. さいごに

今回、韓国国立リハビリテーションセンターの方々がご多忙な折、限られた時間で最大限に技術交流できるようご尽力くださったことに深く感謝いたします。今後も交流を続けていくことで、技術を高め合いたいと思います。

最後になりましたが、ボランティアガイド兼通訳をしてくださった Yang Suyoung さんには韓国滞在中本当に世話になりました。ありがとうございました。